

校歌は学校の精神（スピリッツ）の塊

福島県立安積高等学校校長 久保田範夫

**丁酉（ひのととり）の新たな年、平成29年を迎えた。**（丁酉は私自身の干支でもある。）

昭和55年4月1日、福島県立只見高等学校教諭・新米の国語教師として走り出して以来、37年の月日が流れようとしている。学校は延べ7か所、行政職として県教育庁の4か所で勤務し、それぞれ印象深いことは数多くあったが、ここでは敢えて三つを挙げてみる。

**（Ⅰ）本県初の「少子化による統合」直前の高校勤務と校歌の作詞**

平成19年4月より棚倉高等学校長の職務に就き、同校に2年間勤務、東白川農商高等学校との統合（平成21年4月、修明高校誕生）を推進した。両校の同窓会を始め統合に反対する空気が燦々の中、統合のメリットを根気強く説明し、教職員の意識を高めながら地域住民等の理解も得て、統合にこぎ着けた。また、修明高校の校歌制定に当たり、今まで、本県の共学化の際には、著名な詩人や作家・歌手等によって校歌が作成され、「詞も曲も素晴らしいが、何となく校歌らしくない」という思いが私にはあったので、「あゝ修明 我らが母校」の歌詞を入れ、「棚倉」と「東白川」を新たな校名・校歌に使えないという制約の中、新生「修明」高校の校歌を長く歌い継いでほしいとの思いを込めて新校歌の作詞を担当することができたことは、国語教師としてこれ以上の喜びはない。

**（Ⅱ）2度に亘る母校勤務（教諭として11年間、校長として4年間の計15年間）**

母校安積には、90周年を3年生の生徒として、110周年を教諭として、そして130周年を校長として、不思議なことにちょうど20年刻みで大きな周年行事を経験することになり、このサイクルだと、私が生きていればであるが、77歳の年に150周年を迎えることになる。何らかの形で関わることができればと思っているが、果たしてその願いは叶うのか……。

**（Ⅲ）教育行政に11年間従事するとともに、4年間の福島県高等学校長協会会長**

平成10年4月より県教育庁総務課管理主事（企画担当）として「人・地域・自然と共に個を磨く新世紀ふくしまの教育」を基本目標とする「第5次福島県長期総合教育計画～新世紀ふくしまの学び・2010～」の策定に当たった。当時の総務課長は、文部科学省から出向していた茂里毅（平成28年度文部科学省教職員課長）さんで、彼がいたからこの計画が形になったと考えている。以来、平成24年度迄、人事担当の管理主事・主幹・課長、教育次長と通算11年の宮仕えになった。

平成25年4月、母校安積高校の第43代校長の職に就き、同時に、県高等学校長協会会長に就任し、東日本大震災から約2年が経過した時点での難しい舵取りを任され、4年間務めることになった。2年前に安積の130周年記念式典を挙行、100周年の際の森喜朗文部大臣（当時）に続いて、下村博文文部科学大臣（当時）臨席の下、盛会裏に終了したことは一人のOBとしても感無量であった。ただ、協会長としての出張が極めて多く、ほとんどの会議が福島市で開催されるため、代理出席で対応したことも度々であったが、郡山から50kmの道のりを年間約120日出張（！）という年もあり、体育祭やセンター試験直前の激励会等、多くの学校行事に出られず、生徒・職員に申し訳ないという気持ちで一杯である。

また、高校の周年行事で祝辞を述べる機会があり、4年間で12校を数えた。どの学校であれ、何周年であれ、私が必ず話題にしたのが各高校の校歌と校訓であり、次のような趣旨の話をした。

～私は、雪が3メートルも積もる只見高校新採用時代から現在まで、新たに赴任した学校では真っ先に校歌を覚えて歌えるように心がけてきた。それは、校歌の歌詞にその学校の創立以来の校訓や精神（スピリッツ）が込められていることが多いからであり、また、校歌を声高らかに歌うことによってその学校と生徒を好きになれるから。～

早いもので、東日本大震災、原発事故から6度目の正月を迎えた。本県の復旧も少しずつ進んでいるように見えるが、今なお8万人を超える県民が避難生活を継続しており、小・中・高等学校・特別支援学校の多くの児童生徒が、未だに県内外で避難生活を余儀なくされている現実があり、廃炉・汚染水対策等々、原子炉に係る課題は山積し、本当に安全だと断言できるまで、この先何十年かかるのだろうと暗澹たる思いを抱いているのは福島県民だけなのではないか、と考えてしまうことがある。さらに農産物等の風評被害と大震災そのものの記憶の風化という二重の逆風など、様々な課題が山積している。福島県はもとより、岩手・宮城を含めた所謂「被災3県」関連の話題も、時折全国版のニュースで取り上げられることもあるが、全国的に見れば大震災の「風化」は止めようがないようにも感じられる。福島県の復興はいまだ途上にあることを忘れず、国の教育改革の激流に流されずに、福島未来を担う子どもたちにとって、より魅力ある高校づくりに取り組む校長さんたちを陰ながら支えていきたいと考えている。